

黒井弘騎

表紙イラスト／本町圭祐

聖母天使マリエル

ハウティングメモリー

試し読み版

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『聖母天使マリエル ハウンティングメモリー』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『新装版 聖天使ユミエル シャドークルセイド』『新装版 聖天使ユミエルⅡ ダスクリベレーション』『聖天使ユミエルⅢ～Ⅳ』（キルタイムコミュニケーション・刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



聖母天使マリエル

ハウティングメモリー

黒井弘騎

表紙イラスト／本町圭祐

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

はむらまり

羽連真理

豊満な肢体を情熱的な真紅の衣で包み込み、美しき天使へと姿を変えて影魔と戦う変身シスター。またの名を光翼天使マリエル。

はむらゆみ

羽連悠美

真理の最愛の娘としてその遺志を継ぎ、後に光翼天使ユミエルとなってエクリプスと戦うことを運命づけられた少女。

※ 一これまでのあらずじ ※

自らの心の闇に吞まれてしまった人間の成れの果て——エクリップス。

人に仇なす異形と化した彼らを人知れず狩り、人々の幸せを守り続けてきた聖女がいた。豊満な肢体を情熱的な真紅の衣で包み込み、美しき天使へと姿を変えて影魔と戦う変身シスター——彼女の名は羽連真理^{はむらま}、またの名を光翼天使マリエル。

歴戦の変身ヒロインを待ち受けていたのは、あまりに淫惨な末路だった。

エクリップスの支配者・影魔王アルファエクリップスとの戦いの最中、最愛の娘悠美^{ゆみ}を人質に取られたマリエルは、娘の安全と引き換えに己の肉体を影魔の群れに差し出す事に。

愛娘の眼前で無数のエクリップスに輪姦され、下卑た欲望を叩き込まれる屈従の聖母。熟れ育った肉体を淫靡に用いた肉奉仕を強要され、穴と言う穴を異形のペニスにくまなく犯し抜かれる。いつ終わるとも知れぬ陵辱の宴の中、献身の聖母は、屈辱とともに被虐の悦びに堕ちていく——。

——二次元ドリームノベルズ114 『聖天使ユミエルⅢ』より

※

町外れの小さな教会では、日々神への賛美歌が響く。

澄み渡ったピアノの演奏に乗せた、神の庭を彩る聖なる歌。

この小さな神の家を守るうら若きシスター——羽連真理が歌う聖歌は、迷える子羊を優

しく包み、慈愛に満ちたその微笑は、それだけで人々に安らぎと救いを与える。

母性溢れる包容力に、禁欲的な法衣でも隠しきれないほどに熟れた豊満な肉体。天使さながらに魅力的な聖母に焦がれ、この教会に足を運ぶ信者は少なくはない。

そして優しい修道女は、あまねく人々を救うため、祈りを込めて聖歌を歌うのだ。だがその夜——神の庭を彩っているのは、人々に安らぎを与える優しい歌声ではなかった。

「うああああ、あ、あああつ！ イクツ……ダメよお、も、もうイキたくないの……あああ、も、もう許し……くひいいい、イツくひイイイ——！」

夜の教会に響き渡る、悲鳴にも似た凄惨な嬌声。聖なる御所で許されるはずもない、汚れた肉の悦びに満ちた絶頂の喘鳴。

神の御前で女としての敗北の証を搾り取られているのは、他の誰でもない——この教会の主である、シスター真理本人だった。

「はああ、はああ、ああああ……ああつ。くうう、ま、またイってしまった……く、屈辱だわ。ま、またこんなやつらにイカされるなんて……うあああ、く、うううう……！」

汗と涙にまみれた美貌が、背徳感と屈辱とで惨めに歪む。包容力溢れる普段の聖母とはまるで違う、雌豚同然の淫靡な痴態。普段は決して見せる事のない惨めなアへ顔を曝け出し、シスターは屈辱に身を震わせていた。

「くひひひひつ、なんだまたいったのか天使様？ 歴代最強の光翼天使と言っても所詮は女……こうなっちまったただの雌豚以下だなあ」

「まったくだぜ。中出しするたびにデカパイ揺らしてイキまくりやがって。よつぽど持て余してたんだなあ、エロシスターめ」

聖職者として許されざる痴態を、口々になじる陵辱者たち。その数たるや、小さな教会を埋め尽くさんばかりだ。百を超える外道の群れは猛る肉棒を隠す事もせず、欲望のままに聖女を犯し続けていた。

神をも恐れぬ外道の群れは、当然、神に救いを求めてやってきた信者などではない。それどころか、人間でさえなかった。

「グググググッ、グゲ、グゲグゲグゲ……」

「ゲヒヤヒヤヒヤヒヤ、ヒヤハアアアアア——！」

口々に下卑た哄笑を上げる、無数の影。ある者は獐猛な獣の顔を持ち、またある者は爬虫類の鱗で全身を包み、あるいは昆虫と人間とが混じりあつたかのような姿をしている。主の目前で冒瀆の限りを尽くしているのは、悪魔と見まごうばかりの怪人どもだった。

エクリプス——自身の欲望に屈し、己の影に吞まれた人間の成れの果て。人の心を失つた怪物たちの行動目的はただひとつ、飽くなき欲望の充足のみ。無限の邪欲を満たすため、エクリプスは人の姿さえ捨て去っている。おぞましく変異した獣の肉体を用い、彼らは皆、

一人の獲物を食べるように蹂躪し続けていた。

「へへへっ！　なあシスター、また出さず……いいだろお、中に出してもいいよなあ？」

「お、俺も一緒にいくわ……シヤハハハッ！　すっかり解れたエロエロのケツ穴、俺たちのザーメンでドロドロにしてやるよ！」

巨軀を誇る牛頭の怪物が、腕ほどにまで巨大化した勃起根で聖母の雌穴をひねり壊す。蛇と人間とが混じりあつた怪人が、人間には不可能な腰使いで猛烈なアナルピストンを繰り返す。またあるものは無数の触手で豊満な乳房を締め上げ、男根状の肉紐から大量の白濁を聖女の美貌に浴びせ続けていた。

そして欲望の影は一人の例外もなく、人間離れた精力を誇っているのだ。

「ひ、ひい、ひいひい!?!、そんな……ダ、ダメよ。今達したばかりなのよ……な、なのにまたなんて、また中に出されたら……ひううう、あつああああ——！」

ドブツ！　ドブツドブツドブツドブツ！

異形の怪人に前後からサンドイッチにされ、双穴に同時に大量の白濁を注ぎ込まれる。薄膜一枚隔てただけの肉穴を両方同時に埋め尽くされ、真理は休む間もなくさらなる絶頂に押し上げられていた。

「ひい、イ、イクツ……イク、さつきイったばかりなのに……またイカされるううっ！」
麗美なブロンドを振り乱し、喉を仰げ反らせ乱れ狂う淫辱のシスター。悶えるたびにD

カップオーバーの美巨乳が揺れまくり、零れんばかりの熟尻果が左右に躍る。

普段は淑やかに隠されている聖母の肢体は、今は開放的に曝け出されていた。今宵スタアの豊満な肉体を包んでいるのは、普段通りの禁欲的な修道服ではないのだ。

スタイル抜群の肢体を包み込む、情熱的な真紅のコスチューム。そのデザインはシスターの聖衣を模しながらも、静的な修道服とはまるで真逆の印象を与えるものだ。

大きく十字に開かれた胸生地からは熟れきった巨乳が魅惑の谷間を覗かせ、スカートに刻まれたスリットからは肉感的な太ももが惜しげもなく曝け出されている。薄手のスーツはぴっちりと肌に密着し、グラマラスなボディラインをいつそう艶かしく強調していた。

だが高い露出度を誇りながらも、その姿は決して卑猥な印象を与えるものではなく、むしろ高貴な聖性さえ感じさせるものだった。紅布を彩る黄金のラインや、ヴェールに刻まれた聖なる十字架が、いつそうの神々しさを醸し出していた。

貞淑な聖女の内に眠る、情熱的な誇りを感じさせるコスチューム。高潔な人柄を感じさせる真理本人の麗貌も手伝って、その姿は見るものに畏敬さえ抱かせる。

そして何より、その背より生えた雄雄しき翼——聖なる輝きを放つ二対四枚の光翼が、彼女が汚すべからざる聖存在なのだと言語っている。

天使——比喩ではない。

人々に救いをもたらす修道女とは仮の姿。人知れずエクリプスと戦う正義の変身ヒロイ

ン——光翼天使マリエル。それが羽連真理の本当の姿だ。

影あるところに光あり。人々の幸せを守るため、人知れず欲望の影を狩り続ける。決して報われず、誰にも賞賛される事もない日陰の使命に、真理は命をかけて殉じてきた。

すべては罪なき人々を守るため——気高き使命のもと、真理は長きに渡り影との戦いを続けてきた。誇りを胸に紅き天使へと姿を変えたマリエルの力は、歴代の光翼天使の中でも最強と謳われるほど。その存在は、エクリプスにとつて恐怖の対象でさえあった。

だが、そんな無敵のヒロインも、今や惨め極まる敗北の姿を晒す事となっていた。

「くひひひっ！ 最強の光翼天使サマも、こうなっちまったらおしまいだなあ」

「ああ、まったくラッキーだったぜ。まさかアンタを犯れるなんてなあ……へへへ。おらあまた出さず、このままイカせまくって俺のチンポで犯し殺してやるぜ！」

サディステイックな哄笑とともに、激しく腰を突き出すエクリプスたち。何十回と射精しても少しも衰えない魔根が、炎症を起こしてしまっている膣肉にまたしても灼熱のマグマを注ぎ込んだ。

「う、あ、あああつ！ いやああ、ま、また出て……ぐうう、ツクうううう〜！」

ビク、ビクビクビク！ スタイル抜群の肢体が辛そうに痙攣し、四枚の翼がピインッと伸ばしきられる。本来なら一瞬で葬り去れる雑魚相手にいいように鬪られ、歴戦の勇士はまたしても女としての敗北を極めさせられてしまっていた。

「はあ、はあ、はあ、はああ……ぐ、あ、ああ。こんな……ま、またイカされて……つくう。こ、こんな雑魚相手に……く、屈辱よ……おおっ！」

はあはあと息を切らせながら、恥辱に呻く敗北の聖女。もうこれで何度目、いや何十回目の絶頂かさえわからない。雑魚相手に女として完全に屈服させられ、誇り高き戦士は涙を流し懊悩した。

「へへ、今さら何言つてやがるんだ。中出しされるたびに膾肉うねらせてイキまくりやがつて、エロ聖母が。お前だつて、本当は犯されるのが嬉しいんだからなあ。」

「ああ、いい年こいてこんな恥ずかしい格好で戦つてやがるんだからなあ。本当は被虐願望ありまくりなんだろ？　なあ、俺たちにメチャクチャにされたくてこんな格好で誘つてんだよなあ、性欲持て余した淫乱マゾの痴女天使さまよお？」

恥辱に喘ぐ聖女を、怪物たちは口々に囃し立てる。孤高の戦士を支えてきた正義の誇りを汚しながら、同時におぞましき獣精でまたしても肉体を汚し尽くす。

「ぐあああ……そ、そんな……つくうウウ！　ち、違う……わたしは、わたしはエクリップスを狩る影の狩人……ほ、誇り高い正義の天使……ひああ、ま、またイク……ううう！」

半ば喪心したまま、聖女は矜持だけで反射的に反論した。だがその刹那、絶頂しつぱなして痙攣し続けている子宮奥を剛直に突き上げられ、またしてもイカされて言葉を殺される。

「うああ、あ、ああっ！ いやあ、イ、イキたくないのに……ひ、ま、また……あああ！」
 「ひひひ、さつきいったばっかだつてのにまたイってやがる。何が誇り高い正義の天使だ、これじゃまるきり俺たちに犯されるための肉便器だぜ！」

「くうう、そ、そんな……わたし、わたしは……ふあああ、あっああああ〜！」

ズブ、ズブズブズブズブ！ イキっぱなしの肉穴を激しく穿り返され、休む間もなく快楽を叩き込まれ続ける。悶えるたび汗と涙が弾けとび、同時に輝く羽根が舞い散った。

雌豚同然のあさましい嬌態に、四方八方から影魔たちの哄笑が浴びせかけられる。

（く、くううう……う！ こ、こんな雑魚どもに、いいように辱められて……。わたし、なんて惨めなの……！）

高潔なプライドが、耐え難い屈辱に軋みを上げる。

本来なら歯牙にもかけない雑兵たちに辱められ、雌としてどうしようもなく屈服させられてしまっている——誇り高き戦士は、そんな情けない自分自身が何よりも許せなかった。強く噛み締められた唇には、うつすらと血さえ滲んでいた。

もつとも、彼女がこのような恥辱を甘んじて受けているのには理由がある。

マリエルは誇り高き聖戦士だ。数百ものエクリプスに包囲された絶体絶命の現状でも、最後まで戦いに殉じる覚悟はある。そして彼女が戦えば、この場にいる怪人の大半は無事では済むまい。今ゆうゆうと聖女を犯している影魔など、本来なら肉塊さえ残さず浄滅さ

せられる運命なのだ。

だが、マリエルは戦う事をしなかった。

いや、できないのだ。

「ママ……ママあ。ママあ……！」

■い少女の声が、下卑た喧騒の中で木霊する。涙に濡れたその声音は、陵虐の生け贄が漏らす嬌声よりもなお悲痛なものだった。

「う、あ……あああ。ゆ、悠美……っ」

朦朧とする意識の中、聖母はその声に応えた。数十回も顔射され涙と精液とで曇っている視界に、声の主の姿が映る。

「ママ……ママ、ママあ！ ひぐっ……ひつく、うええ……ええ〜！」

まだ■歳にも満たないような、■く可愛らしい女の子だった。優しそうな童顔を涙でくしゃくしゃにして、声にならない叫びで母を呼び続けている。

少女の名は羽連悠美。マリエル——羽連真理が誰よりも愛する、世界で一番大事な存在だ。血の繋がりがこそないものの、そんな事は関係ない。戦いだけがすべてだった毎日に潤いを与えてくれた、純真無垢なその笑顔。他人の幸せを守るために戦い続けてきた戦士に、本当の幸せというものを教えてくれた唯一の存在。悠美は真理にとって、本物の天使だった。だが何よりも大事な存在は、強い心の支えであると同時に、戦士にとって決して許されな

い弱点ともなりうる。卑劣極まりない欲望の影が、そこにつけこまないはずがなかった。

「ママ、ママ！ ひぐ……つひ!? うあ……きやあああああ！」

「!? ゆ、悠美っ！」

涙に濡れた童顔が、苦痛に歪む。少女を捕えている巨大な魔物が、ギリギリとその首を絞め上げているのだ。

「や、やめなさい！ 娘には手を出さない約束でしょう……悠美を放しなさいっ！」

今までの嬌態が嘘のように、マリエルは厳しい口調で言い放った。天使の力が振り絞られ、萎びかけていた光翼が最後の光をとまず。裂帛の気合に、今まで聖母を颯つていた怪物たちは一瞬身を引いていた。

「クククク、まだそんな顔ができるか。やはりお前は愉しませてくれるなマリエル……流石は、歴代でも最強と謳われる光翼天使だけの事はある」

だが、悠美を捕まえている影魔だけは、まるで余裕を崩していなかった。必死の抵抗を嘲笑い、楽しんでさえいる。

山羊の髑髏に蝙蝠の翼を備えた、まさに悪魔さながらの威容を誇るエクリプスだ。聖母の弱点である愛娘を捕えたまま、ただ一人陵辱に参加せず傍観している。その邪悪なプレッシャーは、他の影魔たちとは比較にならないほどだった。

影魔王アルファエクリプス——数多のエクリプスの頂点に立つ影魔の支配者。その姦策

にかかり娘を囚われたマリエルは、悠美の命と引き換えに、己の身体を差し出す事を強要された。

影魔の首魁を前に戦わずに負けを認めるなど、誇り高き戦士のプライドが許さない。

だが——今のマリエルは、戦士である前に、一人の母親なのだ。

愛する娘のため、聖女は自ら悪魔に頭を垂れ、完全屈服の肉奴隷となる事を選んだ。

そして、魔の宴は始まった。

奴隷天使に課せられた命令は、影魔王の配下すべての欲望を受け入れ満足させる事。

屈従の聖女に対し、怪人たちはまるで容赦をしなかった。百を越える影魔の群れは我先にと挑みかかり、その豊満な媚肉と容赦なく貪り、高潔な心を冒し続ける。陵虐が始まってから数時間——穴を問わず中出しされた回数は四桁にも上り、極めさせられた絶頂はその倍ではきかない。

絶望と呼ぶほかない陵虐の連続に、最強のヒロインも、もはや限界を越えていた。

だが——。

「ああつ……悠美、悠美！」

マリエルは、未だ落ちきつてはいなかった。

肉体はとうに屈しきり、激しい責めに肉悦を覚えてしまうほどに開発されている。高潔な精神も汚し抜かれ、嬲られる事に悦びを見出す被虐の性癖を教え込まれてしまっている。

だがそれでも、マリエル——真理の、娘に対する純真な想いだけは壊れてはいなかった。そして、決して折れない母としての強さだけが、今の聖母を支える最後の一线なのだ。

「光翼天使とは言え、肉体も精神もとうに限界を越えているはず。だが、愛するものへの想いがそんな貴様を支えている……素晴らしいぞ。フハハ、クハハハハハ！」

我が子を守る母の強さを、影魔の王は嘲笑った。少女を掴んだ右手に力が籠もり、小さな身体がいつそう強く締め上げられる。

「ひ、あがああ！ 痛いっ……助けてママあ、ママ、ママああ！」

「あ、ああっ！ やめて……やめなさい！ お願いよ……わたしはどうなってもいい、だから悠美には手を出さないで……！」

悲痛な叫びが、淫獄の教会に響き渡る。下劣極まる影魔に哀願するなど天使のプライドが許さないが、今はそんな事どうでもよかった。

「フフフフ！ 王の誇りにかけて、我は約束は違えぬよ……娘の無事は保障しよう。だがそのためには、貴様にも約束を果たしてもらわねばな……」

「つく！ い、いいわ……なんでもする。だからお願い……悠美は、助けて……」
娘の命のため、聖母は己の身体を捧げた。もはや彼女に選択権など存在しない。

マリエルは、完全にエクリプスの言いなりになるしかないのだ。

「よい心がけだ。ではそうだな……うむ。一つ面白い趣向を思いついた」

決して気高さを失わない、それでいて犬のように従順な奴隷天使に、影魔の王は新たな恥辱の命令を下す。

（くっ……な、何を。これだけ辱めておいて、これ以上、一体何をするつもりなの……）

決して表情には出さないものの、内心、マリエルは不安を禁じえなかった。

「なに、心配するな。貴様は我が臣下をよく満足させた……これは務めを果たした貴様への、我からのせめてもの心遣いだ。娘一人を残して逝く事になる貴様に、せめて母として最後の義務を果たさせてやろう」

そんな内心を見透かしているのか、影魔の王は不遜だった。影魔たちの放った精液にまみれ白濁池と化している教会中を見渡すと、大仰な調子で聖母に命令する。

「かように汚し尽くされた場所に娘一人を残すのは、貴様とて心残りだろう？ ゆえに娘が暮らす居場所を清める最後の機会をやるうではないか……ただし今の貴様は母である前にただの雌犬。身分相応に這いずり、その舌で汚れの一滴も残らず舐めしゃぶって掃除するのだ」

「な……っ!？」

あまりに常軌を逸した提案に、マリエルは一瞬言葉を失った。反対に、周囲の影魔たちはこの下卑た趣向に高らかな賛美を上げている。

「へへへへ！ そりゃあいいいぜ。さすがアルファエクリプス様、なんとお優しい事だ！」

「ああ！　こんな肉奴隷に慈悲をくれてやるんだからな。感謝しろよ、メ・ス・イ・ヌ！」
 「く、う、うう！　お、お前たち……っ！」

あまりに腐った怪物たちの擲掄に、腸が煮えくり返る。許されるなら、この場で一片残さず消滅させてやりたいほどだ。

だが今のマリエルには、当然、そんな選択は許されない。

「あ、あ……マ、ママ……」

（……悠美……！）

愛する娘の命が、何よりも大切な悠美の命がかかっているのだ。

母である自分がすべき事は、一つしかない。

「さあ、急ぐのだ。夜明けまでもう時間がないぞ……それまでに」

「わ、わかったわ……約束よ。こ、こうすれば……悠美を、助けてくれるのね……？」

きつく唇を噛み締め、迷いを断ち切る。屈辱に肩を震わせながら、マリエルは恥辱の命令を受け入れた。何百匹もの影魔の精でドロドロに汚されている床に膝をつき、犬のように四つんばいになる。白手袋ごしに感じる生乾きの精粘の感触が、ひどくおぞましかった。

（ううっ……き、気持ち悪い。ネバネバして、すごい臭いだわ……）

眼下に広がる白い池を見つめ、聖女はゴクリと生唾を飲み込んだ。

（こ、これから……こんなものを。でも、これも悠美のためだもの……！）

見ているだけでも吐き気がする汚物の塊。一度きつく唇を噛み締め意気を込めなおすと、マリエルはゆっくりと唇を伸ばし、舌先を床へと近づけていった。

目の前に近づいてくる、黄ばみ固まりかけた腐精のカーペット。むわつと香る雄の腐臭が、肺腑に染み渡る。

（くうっ……く、臭い！　なんて汚らしいの……は、吐き気がするわ……！）

下の口でも上の口でも、数えきれないほど飲まされたエクリプスの精液。こうして改めて目にする、そのおぞましさは格別だった。数えきれない影魔の精液が混合しあつたそれは、吐き気を催す濃厚な性匂を放っている。生乾きのザーメンは凝固しかけており、表面にはいくつものダマができていた。

（こ、こんなものを……。こんな汚らしいものを、舌で舐め取れだなんて……！）

少し匂っただけでも肺腑が腐り、見ているだけで嘔吐を催してしまふ。これを啜るぐらゐなら、糞尿を舐め取ったほうがまだマシだと思えるほどだ。

「く、う……はあ、はあ。く、ううう！」

どんな恐ろしい敵に対しても決して怯まない聖戦士さえ、それを実行に移すのには数秒の覚悟を要した。

「どうしたどうしたあ？　雌犬には似合いの餌だろ、さつさとザーメン食えよ雌犬天使！」

「はあ、あ……つくうう！　わ、わかった……んむ、ん……ちゅぶっ！」

迷っている余裕も、拒絶する権利もない。急かされるままに、マリエルは舌を伸ばした。恐る恐る伸ばされた舌が、床を舐め精塊をしゃぶり上げる。

瞬間——口内に広がったのは、この世のものとは思えぬ腐敗しきった風味だった。

「んちゅ……く、んんんっ！ んげえ……げほおお！」

心で覚悟していても、身体が受けつけない。たまらずえずき、マリエルはそれを吐き出してしまっていた。

（ま、不味い……臭い、苦い、気持ち悪いっ！ む、無理よ……こんな、こんなのを飲めだなんて……！）

フェラチオやイラマチオのたび、口内に大量に注ぎ込まれたミルクの味。どれだけ飲んでも決して慣れるはずもないが、まだ搾り立てのそれなら辛うじて我慢できた。

だがこれは——揮発した事によって何倍にも濃縮され、生乾きの状態でねっとり粘りを増し、味も舌触りもいっそうおぞましさを増している。

その味と触感たるや、決して許容できるものではなかった。

「ううう……げぼ、げぼ、げほっ！ うげえ……お、おえ……え……！」

一口舐めただけで口中すべてが腐り果て、決して落ちない腐匂が染み込んでいる。苦悶に喘ぐ唇からはだらだらと唾液が零れ出し、精液まみれの床をさらに汚してしまっていた。

「……何をしている？ 誰が自分で汚せと命じた……清めろと言ったはずだ」

「げ、げほ、げほっ！　ご、ごめんなさい……で、でもこれは……」

「……わかつているのか？　自分から約束を違える、その意味を」

「……！」

脅迫ではない。

ただ冷たく発せられたその問い、そして僅かに力を増す右腕の動きに、マリエルは心臓を握り潰される思いがした。

「うあ……マ、ママ。ママ……ッ！」

「す、すみません……申し訳ありませんっ！　お許しください……す、すぐにしますから。ですから、娘にだけは手を出さないで……！」

必死で振り絞る、心からの哀願。影魔の王は、無言で首肯を示すのみ。

（そ、そうよ。これも悠美のためよ。悠美のためなら、わたし、なんだって……！）

先ほどの苦味と腐臭が、未だ咽喉に絡みついている。苦々しい嫌悪感を娘への愛情で必死に押さえ込み、聖母は再び精液床へと舌を伸ばした。

「れろっ……ちゆる、ちゆくっ。んげっ……れろ、はむ、じゆるるるっ！」

硬く目を閉じ、なんとか意識を殺して、無我で腐汁を口にする。覚悟を決め、マリエルは一口に精液の残滓を啜り飲んだ。

「んじゅうっ……くああ、おえっ……んぷ。はあ……れろ、くちゅ、ちゆるっ！」

不快極まる雄の味に、味覚どころか思考まで腐りそうになる。身体が受けつけず反射的に戻しそうになってしまいが、聖母は驚異的な克己心でそれを抑え、一気に勢いをつけて精液を口に収めていった。

「はあ、はあ……んじゅ、ちゅっ。こくっ……んむ、ん……っ！」

端正な美貌が苦痛に歪み、嫌な汗が滲み出す。白い喉が、艶かしく波打った。

（ぐうっ……な、なんて濃厚な味なの。喉に絡みついて……気持ち悪い、おぞましい……！）
苦痛にも似た嫌悪感が、体内へと広がっていく。凝固した精液ゼリーは嚥下しても食道にねっとり粘りつき、最悪の後味を長く口内に残していた。

「ひやは、ひやはははは！ おいおい見たかよ、こいつ本当に飲みやがったぜ！ あんな汚えザーメンに口つけるなんざ、残飯でも漁ってたほうがマシだろうよ！」

「いやいや、この雌犬にとっちゃご馳走なんだよ。それでもなけりや自分からこんな真似できるかよ。こいつ、俺たちのチンポ汁が大好きでたまらないんだぜ！」

愛する娘のための献身など、エクリプスは理解しない。四方八方から浴びせられる下卑た野次が、聖女のプライドをズタズタに切り裂いていく。

「く、う……う、ううう〜！」

（ふ、ふぎけないで！ こんなもの、誰が好き好んで飲むのですか……！）
怒りと屈辱に身を震わせるマリエルだったが、しかし彼女は覚悟している。

自分は反論できる立場ではない。娘のために自分が取れる行動はただ一つだけなのだ。

「はあっ……く、うう。はむっ……ちゆる、れろ、れろお……ん！」

べつとりと残滓をこびりつけた舌を再び伸ばし、マリエルは床を舐り精液を啜り取っていく。欲望の影たちが放った精液は無尽蔵で、少し啜ったぐらいではまるで床は綺麗にならない。まるで深く降り積もった雪を掻いていくかのような苦行だが、口に含むものはそんな上等なものではない。

「うあっ……く、ぶっ！ おえっ……ん、ぶっ……く、んんんん！」

一口目の味が後を引き、二口目は先ほどよりさらに濃厚で飲みづらかった。これ以上なく汚らわしい汚物を、身体は受け入れずに吐き出しそうになってしまふ。だが聖母は必死で口を嚙み、顔面蒼白になりながらもそれを押さえ込む。

（ダ、ダメ……吐いてはダメよ。飲み込むの……何も考えずに、このまま……！）

味を意識する前に、そのまま飲むのが最善の手だ。一気に嚙下しようとするマリエルに、突如信じられない命令が下される。

「待て、一度口の中に溜めてみせろ。大きく口を開き、舌の上で味わう様を我が臣下どもに見せつけるのだ。貴様のような雌犬に餌をくれた主人に、感謝を込めてな」

（なっ……！）

目の前が真っ暗になった。飲み込むのさえ必死だったのに、ゆっくりと味わうなんて絶

望的すぎる。しかもその様子を、下劣極まる雑魚どもに見せなければいけないなんて――。

「く、屈辱よ……屈辱的すぎるわ！ こいつ、どこまでわたしを辱めれば……！」

気高いプライドが、ミシミシと軋む。怒りと屈辱に、光の翼がふるふると痙攣した。

「何だ……不服か？ まだ立場がわかっていないようだな……貴様は人でも天使でもない。床に落ちた汚物を自ら啜るような、最低最悪の雌犬なのだぞ？」

「ゲへへへ、そうだけ聖母様あ。悦んで尻尾振って命令に従いなよ、俺たちがお前のご主人様だ」

戦士としての誇りどころか、人としての尊厳までもを徹底して汚し抜かれる。プライド高き天使にとって、心への陵辱は、肉体への責めより何倍も辛く苦しいものだった。

「くうう……わ、わかりました……。では、こうすれば……ふあ、あ……あむっ」

死よりも辛い屈辱に打ち震えながら、マリエルは娘のために命令に従った。ポリウム抜群のヒップをゆさゆさと揺すりながら、だらしなく口を開けてお口の中をエクリプスたちに開帳する。

上品な唇から伸ばされた舌は、唾液と白濁とでぐちゃぐちゃに汚れきっていた。無防備に大きく口を開け、ペロンとだらしなく舌を伸ばす。頬を涙で濡らし口内を精液で満たしたその表情は、あまりに悲痛で陰惨だった。

「く、くううう……うう！ 悔しい……屈辱よ。こんな、こんなものって……！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>